

茅ヶ崎市立汐見台小学校

研究テーマ：聴くことを通して、相手を思いやり支え合える子を育てる

1 実践の目的

本年度の研究テーマは、「聴くことを通して、相手を思いやり支え合える子を育てる」とした。このように設定した理由は、本校の学校教育目標「のばす・つなぐ・ささえあう」と大きく関係している。その大切さや意義については教職員全体が理解しているところである。では、それをどう実現していくのか。そこで本校では「聴く」ことを根幹とし、学校教育目標の中の「ささえあう」の部分に特に焦点を当てて実践研究をしていこうと考えた。

自分から対象に意識を向け「とらえる」ことから始まる「学ぶ」という行為。人のことばに興味を持つこと、それは「聴く」ことから始まることである。また、「ひと・もの・こと」への関心も、「聴く」ことが学びのきっかけとなる。「聴く」ことが、学級経営やクラスの学ぶ雰囲気、ひいてはクラスの間人間関係に大きく作用することを、研究実践を始める前に、教職員全体で共通理解を行った。そして、そこをスタート地点とし、本年度の研究実践を行っていくことになった。

2 実践の内容

(1) 校内研究の体制

本年度は学校全体での繋がりをより意識できるように、また話しやすさなども鑑みて、小グループで研究を進めていくこととした。小グループは、各学年、特別支援学級の先生をバランスよく構成し、授業公開やその後の協議会など

も、その小グループで実施することとした。

(2) 「聴く」ことについて

本校では今まで「聴く」ことの重要性を認識はしていたものの、学校全体で統一して共通理解を図って進めるということは特段なかった。そのため、5月に、基本となる「聴く」についての項目と、基本となる「学習規律」を研究・研修グループから提示し、各クラスで伝えていくこととした。また級外の先生も同様のことを子どもたちに伝えられるよう、項目を各教室に掲示し、いつでも確認できるようにした。

- ・話している人の方を見て、話を聴きます。
- ・先生や友だちの話を、最後まで聞きます。

また教職員には、各学年で、聴くことについての「目標」・「手だて」・「結果」・「次に向けて」を考え記述してもらい、年間を通してそれを実践した。

(3) 校内研修会の様子

本年度の研究では、年3回の授業研究・協議会の他に9月と2月に、職員研修会を実施した。

① 9/1（月）臨床心理士 大草 正信先生

夏休み明けすぐに大草先生による研修会を実施した。大草先生には「適応行動ができない児童への効果のある児童指導のあり方～行動することだけでなく思うことも教える体験対話指導を中心に～」をテーマとして、講演

をして頂いた。本研修会では、まず心を理解するための基本概念を教えていただいた。心は「思ってしまう思い」（一次意識）と「自分で創る思い」（二次意識）の2つでできていること。例えば、「いやだ、できない、ムリ」といった「思ってしまう」（一次意識）を「やってみよう、～しよう、できる」といった二次意識に変換すること。そして、「適応する思い」（二次意識）を作り出して行動に繋げていくことなどを教えて頂いた。研修会の後半では、「できる心理体験」を扱う体験対話教育を具体的に教えていただいた。人間は「～しよう、できる」と思うから行動すること、そのため教員が児童に対して、「『～しよう、できる』と思うといいよ、思うようにしよう」と対話するなどの基本的な対話指導の方法を教えていただいた。

子どもの変容が見られ始め、トラブルも多くなり始める夏休み明けの時期に、大草先生の話聞いたことはとても大きかったと感じる。具体的にどのような声かけをし、どのように指導していけばよいのか、とても分かりやすい指針を示して頂き、とても勉強になった。

② 2/6（金）国際ムーブメント教育・療法学術研究センター 所長 飯村 敦子先生

飯村先生をお招きし、特別支援学級での公開授業を参観して頂き、放課後は教職員向けの研修会を行った。飯村先生にはここ数年本校に来校いただき、ムーブメント教育についての講義とワークショップを実施している。今回の研修会でも、講義形式ではなく体験型の研修会を実施していただき、教職員は体験を通してムーブメント教育の意義や奥深さを感じることができた。実際には『フープ』という道具を使いながら様々な活動を行った。活動を通して、身体・時間・空間に関する意識をより強くもつことができたと感じる。何より体験した活動が大人でも楽しく活動できるものであり、教職員一同が

終始笑顔で取り組むことができた。とても興味深く、研修時間があっという間に過ぎていった。

障がいのある子どもだけでなく、通常の学級に在籍する子どもも、日頃の失敗体験や運動の苦手などの様々なつまずきが重なり、自己肯定感が低く自信をなくしている状況も少なくない。そのような中で、ムーブメント教育のような楽しい身体運動は、情緒を安定させ、感覚を統合できる一助になると強く感じた。

「からだ・あたま・こころ」を育むムーブメント教育による学びは、子どもの弱点を目立たせず、強みをいかす優しい活動であり、発達の良循環を支えることができる学習活動だと感じた。



3 実践の成果

(1) 教師の変容

本年度の研究・研修を通して、教師の「聴く」ことに関する意識は大きく変化したと感じる。それは、年間を通して、普段の授業から「聴く」ことに関する働きかけを多く行ってきたこと、また「聴く」ことについて、教職員が小グループや学年などで話し合う時間を多く設け、話し合ったことを実践に繋げていくことができたからだと考える。「聴く」ことの価値を教師が改めて認識し、子どもにその価値を伝えるようになったということ、そして子どもたちがその価値をはっきりと認識し始めたこと、そのことが本年度の研究の大きな成果であったと考える。

(2) 子どもの変容

研究の成果もあり、子どもにも大きな変容が見られるようになった。普段の授業で見せる聴く姿勢・意識がどのクラスの児童も大きく向上した。体育館で全校が集まる朝会においても、4月の頃とは比べものにならないほど、どの学年の児童も話に集中し、よく聴く姿が見られるようになった。

4 今後の展開

(1) 残された課題への対応

先生や友だちの話をよく聴けるようになったとはいえ、高学年においてはそれでは不十分であるともいえる。自分の考えをもって聴くこと、自分の考えと比較して聴くことなど、ただ聴くことから発展させ、深い学びに繋げていくことが今後の課題であると考え。また、低学年や中学年では、他者を意識し、聴くことの価値をより認識し、自分たちで聴き合える雰囲気、をさらに良くつくっていけることが次の課題だと考える。

(2) 今後の研究の方向性

今後の研究では、本年度取り組んできたことを継続し、実践面を強化しながら取り組み続けていきたいと考えている。また、来年度は研究部から聴くことをより系統的に示し、発展させていきたいと考えている。ただ、児童の実態と系統的な目標は必ずしも合致するわけではないので、柔軟に児童を中心に据えた目標の設定や実践を行っていく必要があると考えている。